

白分色

郡山ザベリオ学園中学校

私の名前は青山優。その名の通り学校の人からも血の繋がっている人からも「優って優しいよね」「青山さんは誰にでも親切だよね。」などとよく言われる。でもそれは、裏を返せばこう思っているのだろう。「優なら何でもやってくれるから超楽だわ。」「青山だったら頼んでもいいよね。」つまり私は奴隷。

そんな私の一日は鏡の前での笑顔の練習から始まる。もう一人の私が上手に口角を上げている。そんな顔でみんなを騙している私。心底嫌気がさすが、しょうがないだろう。だって、ランドセルを背負っている頃からの癖だから。

「行ってきます。」

自転車で乗っている時は自分一人だけの時間のように感じる。だから、気持ちがいい。

それに対して、教室はいつもうるさい。

特にあのスリーガールズはうんざりする。クラスのボスの花梨を中央に、右に瑠香、左に真凛。必ず三人でいないと駄目な集団動物。

そして、何かと面倒なことを私に押し付けてくる厄介者だ。私は友達が多そうに見えるが、自分から声をかけないといつも一人だ。心からの親友がいないから。心の奥を見せることもない。

お昼の時間。

あのスリーガールズがやって来た。そして、私に言った言葉は、
「優、お昼のパン買って来て。」

私に財布を差し出してきた。パンぐらい自分で買えよと思うが断れないのが私だ。

「いいよ。何パン？」

「メロンパン。よろしく。」

と言いながら、さっさと戻って行った。押し付けられるのはもう慣れてしまった。仕方なく、購買へと向かった。

ある日、親戚で集まっていた。

「優、行くわよ。」

「待って、お母さん。私の服装大丈夫？」

「大丈夫よ。優は本当に心配性だね。」

私だってそう思うよ。本当はこんな自分になりたくなかったのに。

「じゃあ、入るわよ。」

ああ、ここ毎回緊張するんだよね。よし、顔の準備できた。

「こんにちは。」

「こんにちは。」

自分でもすごいと思うほどの演技力だ。バラのような笑顔で挨拶した私。みんなが望むようなものを演じている私。

「ヤッホー、優。」

やっぱりあいつが話しかけてきた。めんど。

「久しぶり、杏奈。」

よっし、笑顔でいけた。

「優ちゃん、こんにちは。」

「こんにちは、浩司さん。」

浩司さんは杏奈のお父さんでそこそ有名な会社の社長さんだ。

「いつ見ても素敵だね、優ちゃん。」

それ、パワハラです。

「お父さん、それパワハラだから。」

「そうなのか。ごめん、優ちゃん。」

「そうだよ、パワハラだよ。」

「いえいえ、私そういうの、気にしませんから。」

満面の笑みで言う私。

「優ちゃんは、本当に良い子だよな。杏奈、優ちゃんを見習いなさい。」

「もー。お父さん、それ何回言うの？毎日のように聞いているよ。」

「優ちゃんからも何か言ってる。毎日言い訳ばかりで困るんだよ。」

何で私が…。てか、毎回この話になるよね。

「杏奈、浩司さんに迷惑かけないようにしなよ。」

「はいはい、分かっているって。」

話が終わらなそうなときは笑えば、この場が丸く収まるのは検証済みだ。

「あははは。」

「あははは。」

ほーら、うまくいった。

「みんなお酒飲み過ぎ。」

「杏奈ちゃん、もっと飲ませてくれよ。」

「ダメ。もう四杯以上飲んでいないでしょ。」

「杏奈、今日ぐらいいいんじゃない。みんなが集まるの久しぶりだし。」

ね。」

マジでみんな飲み過ぎだと私も思うよ。めっちゃ顔赤いし。

「やっぱり優ちゃんは優しいね。」

「ここでもかよ」

「そんなことないよ。」

「優、そこにある台ふき持って来て。」

「お母さんも人使い荒いんだから。」

「はい。」

「お母さん、持ってきたよ。」

「ありがとう。そこ置いといて。」

「何か手伝うことある？」

「じゃあ、お皿洗ってくれる？」

「分かった。」

「終わったよ。」

「もうこっちは大丈夫だから、杏奈ちゃんと一緒にお話をしてたら？」

「うん。」

茶の間の方に戻ると、

「あはは。」

「杏奈ちゃんは面白いよな。明るいし。」

「そうでしょ。面白いでしょ。」

「面白いよ、あははは。」

もうこれ以上聞きたくなくて、外に出た。近くの昔ながらの公園に向かった。

いつもより冷たい風が吹いた。その風が木々を荒々しく揺らした。今

日はいつも以上に自分をつくったから、疲れた。

「はー。」

何か私のことを否定された気がする。私は面白くなくて、暗い子。

「すげーため息だな。何？悩み事？」

ヤバ、聞かれた。

「えっ、何のこと？」

お得意の笑顔でとぼけてみた。

「もう聞いちゃったから、俺の前では偽らなくて良いよ。それに前から何となく気づいていたし。」

最悪。

離れたくて、さびたブランコへ移動した。そしたら、あいつもついて来たけど。

「で、何に悩んでいるの？」

もうコイツにはバレちゃったからもう良いや。ばらすような人じゃないと思うし。偽るの疲れたし。

「いや、別に。」

「お前、知ってる？別について話聞いて下さいって言ってるのと同じだよ。」

「ほっといてよ。」

「まあいいや。何かあったら話ぐらいいは聞くよ。そうだ、自己紹介してなかったよな。俺は一ノ瀬湊人。同じクラスだよな。湊人って呼んでよろしく。」

その満面の笑みは誰もが羨ましがするような笑みだった。

一ノ瀬湊人。私と同じクラスで、物事をはっきり言う性格。なのにみんなの和の中心で人気者。当然、友達もたくさんいる。私とは真逆の性格だ。

「あ、私は青山優。よろしく。」

私も彼の笑顔に負けないように満面の笑みを返した。もちろん偽りのだけ。

「別に偽らなくて良いって言ったのに。やべ、遅れちゃう。じゃあごめん俺行くね。また明日。」

さっきよりも暖かい風が吹いて、穏やかに木々を揺らした。彼の去っていく後ろ姿は羽が生えているように軽く、軽やかだった。なぜか、さっきまで私の心の中にあっただす黒い液体が少し減った気がした。

先生に荷物の整理を頼まれた。重いし、昼休みが潰れたし、最悪だ。先生、人使い荒すぎ。でも、昼休みにやることないからいいんだけど。

「このスイーツ可愛くない？」

「可愛いし、美味しそう。」

教室から楽しそうな笑い声が聞こえた。

「放課後行く？」

「もちろん。」

「あっ、どうしよう。私、掃除当番だ。」

「優に頼んじゃおうか。」

「そうだね。」

どうしよう、教室ついちゃうし、休み時間終わっちゃうし。教室入るしかないけど、放課後潰れるのは嫌だな。聞こえていないふりをしながら、教室へと入る。

そして、放課後。

「優、今日の掃除当番変わってくれる？」

やっぱり。そして、何で三人で来るの？一人で来いよ。後で面倒なことになるから、やるしかないんだよな。

「良いよ。」

笑顔で言う私。

「ありがとう。じゃあ、これよろしく。」

早々と帰るスリーガールズ

「やったね。これで行けるね。」

「速く行こー。」

全部聞こえてますけど。いいな。私も行きたい。

んん。何か視線を感じる。後ろを振り返ると、ドアの前にたくさんの友達に囲まれている湊人と目が合った。何もなかったようにほうきを動かす。心にどんだん灰色の汚れた液体が溜まっていくようだった。

次の日。登校して、机の中に教科書をしまおうとすると、何かがクシャッと音がした。机の中を覗くと小さい紙切れが入っていた。そこにはこう書いてあった。「放課後、公園に来ること。絶対だからな。湊人。」行きたくないけど、行くしかないよな。そんなことを思っていると、湊人と目があってしまった。嫌らしい笑みを私にしか見えないように浮かべていた。

そして、放課後。ブランコを漕いでいると、

「もっと自分を出せば。」

と言いながら、やって来た。

「もう本当の自分がわからないの。」

「ならさ、想像してごらん。これからもずっと続く未来を。お前はどうか生きたいんだ。」

私は、私は、

もう言いなりになるのはいや。そんなのはもういや。

「私は自分にしか描けないような人生を歩んでいきたい。自分色を見つけ出したい。」

「よっし。なら俺が手伝ってやる。お前のお前だけの自分色を探すための手伝いをしてやる。」

「早速明日の放課後ここに集合。じゃあ。」

そして、次の日。

「よーし、やるか。まずはこれだ。心理テスト。」

「なんで、心理テスト？」

「自分を知るなら、そりゃあ心理テストでしょ。」

「意味分かんない。」

「いいからやれ。」

取り戻しに行こう、本当の自分を。

希望の光が心の中で光った気がした。

帰ろうとすると、また出たスリーガールズ。

「優、この教科書集めたやつを資料室に置いて来てくれない？」

と言い、私に押し付けた。

そんな時、私の手が軽くなった。そして、私の額の隣にはもう一つの額があった。

「これ本当に自分で出来ないの？」

「湊人くん。」

花梨の声が変わった。

「私たち、これから用事があって、どうしても行かなきゃいけないんだよね。」

「用事って何？本当に今日行かなきゃいけないの？」

「それは。」

「でも優はこの後何もないでしょ。だったらいいじゃん。」

本性出してきたな。てか、暇人だったら、何でもやらして良いっておかしいでしょ。

「残念だけど、優はこれから用事があるから。じゃあな。頑張って。」
湊人は教科書を花梨に押し付けて、私の腕を引っ張りながら教室から

出て行った。あのスリーガールズが固まっっていて、私は誇らしく思えた。

学校を出て、駅前の方に向かっていった。そんなことより、

「ちよつと待つて。私、用事なんてないけど。それに面倒くさいことになりたくないから別にやってあげても良かったのに。」

助けてもらったのに、可愛くないことを言う私。自分でも情けないと思う。

「お前は行くところがあるだろ。速く行くぞ。」

「は？用事なんてないし、どこにも行かないから。」

「うるさいな。黙ってついて来い。」

駅前の今どきの人がたくさんいるところに来た。

「スフレパンケーキ二つとアイスコーヒー。お前は。」

「え？」

「飲み物。」

「えつと、アイスティーで。」

「かしこまりました。」

ここはすべてがキラキラしていて私には居心地が悪かった。

「意味分かんないんだけど。」

「前から来たかったんだよ。」

こんなキラキラしているところに？

「てか、パンケーキとか食べるんだ。」

「悪いかよ。」

「別にそんなこと言ってないじゃん。意外だなんて思ったただけだよ。」

甘いものは食べられませんって顔してるから。

「パンケーキ食べたかったし。ここ結構有名なんだからな。それにこんな女ばっかりのところに男一人で来られるわけないだろ。」

「確かに。女性ばっかりだし、湊人が一人で来てたら笑えるわ。絶対

に浮くね。」

「だから、言っただろ。お前は用事があるって。俺を笑いにさらすわけにはいかないしな。まあ、今日は俺のおごりだから。」

「おごってくれるなら許す。」

それに憧れだったから。

「お待たせしました。」

色とりどりの花が上につけていて華やかだった。

「いただきます。」

「ごちそうさまでした。」

見た目も味も最高だった。

「行こつか。」

「うん。」

風で髪の毛が揺れて、湊人の横顔がきれいだった。あのパンケーキようだった。その横顔を見ていると、このままではよくないと思った。

「湊人、公園寄って行っても良い？」

いつもの公園のベンチに座った。心地よいそよ風が私に合図をくれていたようだった。

「今日はありがとね。私、憧れだったんだよね。」

「え？」

「誰かと帰り道に寄り道すること。」

湊人とだったのは予想外だったけど。

「お前、友達いないもんな。」

「それ私のコンプレックスなんだから、言わないでよね。」

ほっぺを膨らませてみた。

「お前、不細工な顔してるぞ。」

「ひどい。」

「悪かったって。」

「私、小さいときに自分を見せるのが怖くなった。」

小学校の折り返し地点のカレンダーが変わる頃、六年生へのプレゼントを決めていた。私は元々口下手だったが、これはどうしてもやりたかった。だから、

「折り紙が良いと思います。」

そう、私は言った。でも、みんなは

「あははー。笑える。」

「折り紙、作るの面倒くさい。」

「子供っぽいから、絶対いやだ。」

と言う声がたくさん聞こえた。辛かった。こんな思いをするのはもういやだと思った。こんなことになるなら、自分の気持ちは飲み込んだ方が良いと思った。

湊人は相槌を打ちながら、静かに聞いてくれた。だから、話しやすかった。

「これが私の原点。」

「確かに、男だったら折り紙は嫌かもな。でも、好き、嫌いって誰にでもあるから、そういうぶつかり合いみたいなものはしょうがないんだよ。ぶつかってきてくれるって事はさ、相手もちゃんと考えてくれてるって事だからな。だって、考えてなければぶつかり合う事もない。だから、どう相手に分かってもらえるかってことが大事なんじゃないのか。」

「そっか。相手に分かってもらわなきゃ意味ないもんね。」

「優ならできるよ。」

「うん。」

この笑顔は本物だったと思う。こんな楽しい日々が続いてほしいと夜空に強く願った。

でも、本当に言いたい事は、やはり言えなかった。水を欲しがる時のように声が出なくなってしまった。

新しい自分を見つけるために、新しい服を買いに行った。挑戦しようと思ったけど、いつも通りの服になってしまった。何やってるんだろう私。変わろうと思ってたのに。

そして帰りにいつもの公園に寄った。

ずっと考えている疑問がまた頭の中によぎった。

「またなんか悩んでいるのか？」

「ねえー。湊人ってさ、何のために生きてるの。」

「どうした、急に。」

「別にたいした意味はないんだけど。最近、高校生が自殺したっていうニュースよくやってるでしょ。そういう人って、生きる意味がわからないから死にたいとか思うんじゃないかな。だから、何のために生きるのか、生きたいのか。それが分かれば死にたいとか思わないと思うんだよね。」

「俺は。死ぬ直前に今までを振り返って、生きててよかった、楽しかったって、思えば、良いと思うんだよ。だから、そのために、一瞬一瞬を大事に、一生懸命に過ごしていきたいんだ。そしたら、俺、頑張ったとか偉かったって思えるでしょ。まっ、俺はそう思うけど、生きる意味って焦って考えて、見つかるようなものじゃないんじゃない。自分のやるべきことをちゃんとやってればそのうち見つかると思う。」

湊人の目は前を向いてとても綺麗だった。私はこの人には敵わないと思った。それと同時にこの人が見ている景色を私も見てみたいと思った。

トイレに行くときスリーガールズの声が聞こえた。

「優ってさ最近人付き合い悪いよね。」

「冷たいっていうか、言うこと聞いてくれないよね。」

「変わったよね。」

これを聞いて私はドキッとした。私はこのままで良いのかな。こんな中途半端で良いのかな。

「悪い方にね。」

「あははは。」

変わらない方が良かったのかな。私なんかが高望みしてちゃダメだったんだよね。そんなこと分かってたのに。浮かれてた。

気づいたら足が動いてた。珍しく、湊人が一人で自分の机にいた。

「放課後、いつもの場所に来て。」

「分かった。」

意外とすんなり受け入れてもらえて、驚いた。

公園に着いてから、数分後。湊人もやって来た。

「もう変わらなくていい。疲れちゃった。」

「そっか。わかった。また明日。」

湊人が去っていった。

「え。もっと止めないの？」

「だって、どう生きたいかは人それぞれでしょ。」

「でも。」

「はー。お前の人生ぐらい自分で決めろ。責任持て。俺は手伝いをするとはいったが、決めるとは言ってない。お前自身で決めろ。」

と言って帰ってしまった。私はどうしたいんだろう。このままで良いのかな。

あれから湊人とは話していない。日に日に疲れがたまっている気がする。今日はお盆だから親戚の集まりがある。

「こんにちは。」

「ヤッホー、優。あれ一人？」

「お母さんは仕事が終わらないみたいで、先に行っててメールがきた。」

「そっか。」

「だから飲み過ぎだつて。もうやめなよ。」

「良いよね、優ちゃん。」

「だめです。飲み過ぎです。」

なんのためらいもなく、そう答えていた。

「優ちゃんまで冷たいな。」

「そんなことないですよ。」

おじさん達はお酒をのみすぎたからなのかもう寝てしまっていた。

杏奈はスマホをいじっていた。

「杏奈、ちよつと2人で話さない？」

「良いよ。」

外に出ると、強い風が吹いて、髪の毛をならした。でもこのぐらいの風の方が気持ち良かった。

「私、杏奈のこと嫌いだった。みんなにズバズバ言ってるのに、みんなから好かれて。」

「待ってたよ。ずっと。優が本当のことを言ってくれるの。」

杏奈は優しい笑顔を浮かべていた。てつきりキレられると思っていたので驚いた。

「え？気づいてたの？」

「これでも十五年一緒にいるんだからね。」
なぜか杏奈は誇らしく言っていた。

「そっか、もう十五年か。時間って自分が思っているより、早く進むし、一日、一分、一秒ですべてが変わることってあるよね」

「だね。うちらみたいだね。それに、一秒一秒が大事だって大人は言うじゃん。今までは何言ってるのって思ってたのに今ならその意味が分かるよ。だって、一分一秒の小さいことで世界が変わってしまうんだから。」

この温かい時間を私は一生忘れないと確信できた。

それから今まで話していないことをたくさん話した。そしたら、

「早く行きなさい。」

「えっ。どこに？」

「そしてちゃんと自分の気持ちを伝えて伸直りしてきな。」

「それもバレてたか。」

「まあね。優は顔に出やすいから分かっちゃうんだよね。」

「えっ、私って顔に出やすかったの？」

「やっぱ鈍感。てか、私だって自分の気持ちを言えない時もあるんだからね」

「嘘。全部言ってると思ってた。」

「そんな、言えるわけじゃないじゃん。まあ、でもほとんど言っちゃうけどね。それか、言えなかったとしても、後で必ず自分の気持ちは伝えるかな。だって、後で悪口とか陰口を言うより良いでしょ。」

「うん。行ってきます。」

「行ってこい。」

杏奈に背中を押された。こんなに軽い気持ちで杏奈と話せるときがくるとは思っていなかった。今なら自分の思っていることをちゃんと誤魔化さずに伝えられる気がした。

庭に停めておいた自転車に乗り、いざ出発。

風が心地よかった。

今の私なら夕日にさえ勝てるような気がした。なんてたった今のはみんながついているから。

私の背中を押してくれた杏奈。

たくさん大切なことを教えてくれた湊人。

誰よりも私のことを考えてくれた家族。

みんなのことを笑わせてくれる親戚のおじいちゃん達。

美味しいご飯をたくさん作ってくれるおばあちゃん達。

悩んだり、笑ったりたくさんのおばあちゃん達と一緒に経験した友達。

いろんな人に愛されていることを知った。

そんな人たちに愛されている私は幸せ者だ。

湊人はアクティブだから外にいるような気がした。だから、駅前や商店街を探しまわった。だが、湊人は全然見つからなかった。

「はあー。」

気がつくところの公園にいた。

「すげーため息だな。」

そこには呆れ顔の湊人がいた。

「こんなやりとり一回目だな。」

「私、あの頃と変わったよ。今まではヘラヘラしているしかないと思っていた。そうしないと本当の自分を見られそうで怖かったから。隠しておくのも良いけど、人生において必ず自分の想いを伝えなきゃいけない時が何回もあると思う。自分のためにも相手のためにも。だから私は、これからちゃんと伝えるために強くなりたい。」

「頑張れ。」

これからも辛いことや悲しいことがたくさん待っている。でも、私は一人じゃない。みんながついているから。みんなとなら、その先に待つ

ている希望の扉を開けることができる。頑張ろう。自分の人生の責任は自分がとるしかないから。人生を楽しもう。

放課後。自分を変えるには、まずあのスリーガールズをどうにかするべきだと思った。そう考えていると、

「優一、雑巾洗って。」

スリーガールズがやって来た。変わりたいなら、勇気出さないとダメだよ。よっし！

「自分でできないの？」

「はっ？何？逆らうの？」

「いや、そう言うわけじゃないけど。」

やばい、圧が強い。でも、ここで引き下がるわけにはいかない。

「社会人になってもこうやって人に頼り続けるつもり？」

「いきなり何？」

強気で行こう。

「質問に答えられてないよ。社会人になっても頼り続けるの？」

「まさか。そんなわけじゃないでしょ。社会人になったらちゃんと自分でやるし。」

「そんな急にできるようなことじゃないと思うけど。それに日々の積み重ねが大事だって良く言うでしょ。だから、今から練習しといたら本当にできない時は手伝ってあげても良いけど。いきなり全部、できないと思うし。その代わり私ができないときは手伝ってよね。」

「分かったわよ。」

嬉しかった。自分の気持ちを言うことができてる。そして、その思いが伝わって。

後ろで友達と話していた湊人と目が合い、にっこり笑い合った。今度こそ本当の笑顔で。

自転車に乗って勢いよく漕いでいると、並木道の木がザワザワと動いて、私に祝福し、微笑んでいるようだった。私はようやく憧れのひまわりのような笑顔に近づいて行った。

「今日も暑いね。」

最近はどうよりとした雲が続いていたが、今日は雲一つない晴天で、屋上から見られる小川もキラキラ輝いていた。

「そういえば、ウエディングドレスとかスケッチブックって白いのが多いでしょ。それって白がこれからの色だから何だって。」

「へー、そうなんだ。なら、それに優の自分色をつけていくんだぞ。」
「うん。」

みんな同じ色じゃつまらない。

もうみんなと同じ色じゃなくても怖くない。

だってみんなそれぞれ違うから。

みんな違った良いところがあつて悪いところがある。

そんな特徴を補って、付け足し合つて。

同じ色の人なんか誰1人いない。

だから、私は私にしか歩めない、私だけの人生を歩んでいく。

(指導教諭／柳 沼 とも子)

《作品の意図》

小学生の頃のでき事により、自分の気持ちを伝えることが怖くなってしまった主人公。

「自分らしさ」とは何か。誰もが一度は考えたことがあるだろう。

そんな難問に主人公はブレながらも友達や親せきに助けってもらいながらも懸命に考えていく。

《作品の寸評》

中学生の優は傷つくことが怖くて本来の自分を出すことができない。他人からは親切で優しい人と思われよう振る舞い、本当に思っていることは口に出せないでいる。変えたいのに変えられない自分にいらだちながらも友人達との関わりから、自分らしくいることの大切さに気づき、本来の自分を出すことができるようになる成長の物語である。「自分は何者なのか」「自分らしくとはどういうことなのか」大人に向かう時期に感じる中学生らしい悩みを描き出しており、主人公に共感して読み進めることができる。優の成長を促したのは、友人の湊人の存在である。湊人のポジティブな考え方は、優に物事を別の面から見る視点を与え、考え方を変えていく。しかも「お前の人生ぐらい自分で決めろ」と突き放す。ここから、優はスリーガールズと対決し、自分の気持ちをはつきりと伝えることができた。最後の「みんな同じ色じゃつまらない。もうみんなと同じ色じゃなくても怖くない。だってみんなそれぞれ違うから」という優の言葉は、作者が最も読者に伝えたい言葉であろう。

(審査員／三輪晶子)